



Title	韓国国立中央図書館蔵『鷺鶴方 全』（古古 7-30 - 44）全文翻刻
Author(s)	二本松, 泰子
Citation	日本語・日本文化. 2013, 39, p. 21-51
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50768">https://doi.org/10.18910/50768</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）全文翻刻

二本松 泰子

## 一 はじめに

朝鮮で制作された鷹書である『鷹鶴方』は、高麗時代～李王朝時代にかけて複数の異本が制作され、日本にも多くの諸本が伝來したことが知られている。そのような『鷹鶴方』に関する先駆的研究は、『放鷹』「朝鮮放鷹史」の第二編「朝鮮の文献に現はれたる鷹の名稱」「附、引用文献<sup>①</sup>」・田川孝三氏『李朝貢納制の研究』第一章「附・安平大君李塔著鷹鶴方について」、村戸弥生氏「朝鮮時代放鷹史・鷹書研究アプローチのための予備ノート」、拙稿「『鷹鶴方』享受の一斑—韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』（古古7-30-44）の奥書をめぐつて」などがある。このうち田川氏論文によると、『鷹鶴方』の異本の種類は以下のように分類される。

①李兆年編とされる『高麗古本鷹鶴方』（14世紀成立）。

②李塔編とされる『古本鷹鶴方』（15世紀成立）。

③李燭編とされる『新增鷹鶴方』（16世紀成立）。

『放鷹』と田川氏論文によると、右掲の①『高麗古本鷹鶴方』は林羅山と朝鮮通信使である金世濂との問答を記載

した『海槎錄』や李圭景(李氏朝鮮第二代国王憲宗時代、在位期間一八三四年～一八四九年)編『五洲衍文長箋散稿』に「星山李兆年」著の『鷹鶴方』のあることが指摘されている。しかし、現存する伝本には、書中には李王朝時代にまで下るとおぼしき諺文が見えることから、高麗時代の李兆年の著書そのものかどうかは疑わしいとする。田川氏はまた、右掲三種の『鷹鶴方』の本文を比較して③『新增鷹鶴方』は②の『古本鷹鶴方』を「増補」したものと判じている。

ところで、右掲①～③の『鷹鶴方』のうち、日本に伝来したとされているのは②『古本鷹鶴方』と③『新增鷹鶴方』である。そのうち、より多くの伝本が流布したのは③『新增鷹鶴方』で、件の林羅山も訓点や送り仮名を付したテキストを所持していた(国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鶴方』(函号三〇六一三〇七))。同書は膨大な数の伝本が全国的に展開し、国字解などの注釈テキストも多數制作された<sup>(3)</sup>。一方の②『古本鷹鶴方』は、③『新增鷹鶴方』が原拠としたテキストとされるにも関わらず、現存が確認できるのは以下の三本の和書のみである。ちなみに、朝鮮書の『古本鷹鶴方』は管見において確認できなかつた。

- ・韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』(古古7-30-44)
- ・宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶴方全』(函号163-1085)
- ・国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶴方』(函号306-312)

このうち先の田川孝三氏論文が紹介している『古本鷹鶴方』の伝本は、宮内庁書陵部と内閣文庫に所蔵されている二本のみで、韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』については全く触れていない。あるいはその存在を知らなかつたのかもしれない。しかしながら、韓国国立中央図書館本の奥書には他の二本と比較して書写(転写)に関する情報がより詳しく述べられている。すでに稿者は、その記載情報を検討して『古本鷹鶴方』の享受の一斑を明らかにした<sup>(6)</sup>。

すなわち、同書は我が国において江戸時代前期（承応年間）～後期（天保年間）に「鷹匠」もしくはそれと所縁深い人物たちに限定して伝来されたものらしく、近世期の鷹匠たちが独自のコミュニティを有していたことを窺わせしめるなどを検証したのである。このように同伝本には、当時の鷹匠たちによる鷹書を介した放鷹文化の伝播の在り方を示唆する情報や、我が国における朝鮮放鷹文化受容の実態を明らかにする様々な手掛けりが記載されている。

そこで本稿では、現存する『古本鷹鶴方』の伝本の中から、韓国国立中央図書館蔵本の全文を掲出する。このような我が国に伝來した朝鮮の鷹書について、その奥書に見える識語を含む全容を紹介することによって、いざれ日韓放鷹文化史を明らかにする手だてとなることを期するものである。

## 二 『古本鷹鶴方』の諸本

前節で紹介した『古本鷹鶴方』の伝本は、写し間違いとおぼしい数か所の異同を除き、三本ともほぼ同文となっている。ただし、各丁における行数や行ごとの字配りについては宮内庁書陵部蔵本と国立公文書館内閣文庫蔵本は一致しているが、韓国国立中央図書館蔵本は異なった体裁となっている。

一方、頭注については、宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本がきわめて近い文言を記載しているが、内閣文庫本は異同を見せる。そもそも宮内庁書陵部蔵本と韓国国立中央図書館蔵本には合計20項目以上の頭注が記載されているのに対し、国立公文書館内閣文庫本の頭注は2項目しか記載されていない。

各伝本の書誌については以下のとおり。

○韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方 全』

所 藏 韓国国立中央図書館。古古7-30-44。

外卷	題	表紙左肩に「鷹鶴方全」と記す貼題簽。
行数	半葉一〇行無罫。訓点付き漢文。	一卷。
蔵書印等	表紙見返部分に楕円形の受け入れ印「朝鮮總督府図書館、図書登録番号」(楕円の中に「昭和12. 4. 15」)	
奥書等	「古 1 3 3 2 3」と記載) 他2つの押印。一丁表に「雜司谷片山賢」他2つの蔵書印。	
一六丁表	に「右古本鷹鶴方雖多不審依無類本/不能校合只任本書訖 通堯」。一六丁裏に「彰考館御本 鷹方/右一者以二山一本藤右衛門所持本一令二書寫/校合一畢 承應三甲午年六月六日/古本鷹 鶴方以二水戸彰考館御本書寫/之天保四年五月廿六日/史館待命 平小山田與清」。	
一帖者	以一平與清小山田將曹自筆/本一於東武邸舍手自下 翰書一寫之一畢/天保四年歲次癸巳仲秋 下瀚日/正木治部越智宿禰通堯(花押)」。	
癸巳之秋九月廿八日起筆/十月五日終卷馴鷹繫務之間連夜務下/採毫成功畢通堯者近江彦根之家士也/善 國學側耽探鷹書頃日奉主命來江戸/館而勤仕余有邂逅者而交情密也固得/借此書寫焉/雜司谷鷹人 片山 勇八賢(花押)」。		
○宮内庁書陵部蔵『古本鷹鶴方全』		
所蔵	宮内庁書陵部。函号一六三一一〇八五。	
内卷題	表紙左肩に「古本鷹鶴方全」と記す貼題簽。	
外卷題	表紙左肩に「古本鷹鶴方全」と記す貼題簽。	
内卷数	一卷。	
外卷数	一七丁。	

寸　法　縦5.5  
×横5.5  
糸印

16.5  
糸印

丁　数　二七丁。表裏に遊紙各一丁。

行　数　半葉七行無野。訓点付き漢文。

奥書印等　一丁表に縦4糸印×横4糸印「宮内省圖書」の蔵書印。裏の遊紙に縦4.5糸印×横2糸印「昭和3年12月 伯爵松平直亮寄贈」の受け入れ印。

奥書等　二七丁表に「彰考館御本奥書」/右者以山本藤右衛門所持本/令書寫校合畢/承應三甲午年/六月六日/古本鷹鶴方以水戸影考館御本/書寫之天保四年五月廿六日/史館待命/平小山田與清」。

○国立公文書館内閣文庫蔵『古本鷹鶴方』

所　藏　国立公文書館。函号三〇六一三一二。

卷　数　一卷。

内　外　表紙左肩にウチツケ書きで「古本鷹鶴方」。

題　目　表遊紙左肩に「古本鷹鶴方」の墨書き。

寸　法　縦23糸印×横16糸印

丁　数　二七丁。表裏に遊紙各一丁。

行　数　半葉七行無野。訓点付き漢文。

奥書印等　表紙右下に縦7糸印×横2糸印「新宮城書蔵」の蔵書印。一丁表に縦3.8糸印×横3.8糸印「日本政府圖書」、縦3.8糸印×横3.8糸印「圖書之文庫」、3.8糸印×3.8糸印「内閣文庫」、縦7糸印×横2糸印「新宮城書蔵」の蔵書印、「明治十六年購求」の受け入れ印。二六丁裏に縦3.8糸印×横3.8糸印「圖書之文庫」の蔵書印。

二七丁表に「彰考館御本奥書」/右者以山本藤右衛門所持本/令書寫校合畢/承應三甲午年/六月六日/古

奥書等

本鷹鶴方以水戸影考館御本／書寫之天保四年五月廿六日／史館待命／平小山田與清」。

注

- (1) 『放鷹』(宮内省式部職編、一九三一年一二月、吉川弘文館、一〇一〇年六月新装復刻)。
- (2) 田川孝三氏『李朝貢納制の研究』(東洋文庫刊、一九六四年、初出「李朝の鷹房と鷹子進上」『朝鮮学報』一四、一九五九年一〇月)。

(3) 鷹書研究会第一回例会口頭発表、一〇一〇年七月一〇日。

- (4) 二本松泰子『鷹鶴方』享受の一斑—韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』(古古7-30-44)の奥書をめぐって—(『鷹書類の調査と研究』所収、平成20年～平成23年度、科学研究費補助金(基盤研究C)研究課題番号 20520189)

(5) 注(4)に同じ。

(6) 注(4)に同じ。

【凡例】

- 一 翻刻は韓国国立中央図書館蔵『鷹鶴方全』(古古7-30-44)によった。
- 一 翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるよう努めた。
- 一 改丁は「をもって示し、(一オ)のように丁数ならびに表裏を示した。
- 一 字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など、一部通行の字体に改めたところもある。
- 一 花押は(花押)とし、その形態は示さなかった。
- 一 頭注については、本文の該当部分に算数字を付し、それに対応する注の文言を一括して本稿の末尾に記載した。

## 【本文】

## 鷹鶴方序

張一九一齡 云、鷹也、者名揚、於尚父、一義見、二於詩、

鶴也、者跡隱、二於古人、一史闕、三其載、豈昔之多、

識物亦有二、遺以、此觀、之鶴、之名始見、レ唐矣、

夫鳥之鶩、者其類有二、曰、レ鷹、曰、レ鶴、其黃、一鷹、

白一鷹角、一鷹鶴、一子青一鶴、乃鷹之類、也其鴉一鶴、

免ト一鶴燕、一鶴海、一青籠、一奪黃、一鶴、乃鶴之數、也凡、

此、鷹一鶴、非二特、玩、形所、以資、之鳥、數、一也、攀、雲、

以、二擊、鳥之、力、一以、爲、娛、故、自、レ古、及、レ今、王、公、大、

人莫、レ不、レ愛、レ之、必窮、一崖谿、一壑、之、險、費、二羅網、之、一才、

巧、一然、一後可、レ得、及、二其、調養、一法、亦有、レ具、畫、不、離、

レ手、夜、當、二保、一護、其、勤、如、レ此、猶且失、二其、節、一常、而、

疾病易、レ生、或、至、レ掃、二群、所謂鷹、者尤、甚、焉古、

今、之人、曾、無、二攻、一治、之、術、一其、得、レ之、也難、其、養、コト、  
レ之、也、勤、而、及、二其、生、レ病、也、拱、レ手、待、レ斃、而、シメ、不、レ能、ハ

レ 救也余竊恨レ之観ニ其飲啄之勢一察ニ其肥瘦  
 之候ニ以尋ニ生スルレ病之根ニ爰將ニ本草一因其藥性一  
 隨レ證治レ之無レ不ニ立效一遂著爲レ方大一抵調ニ養スルノ  
 鷹ニ鵠ニ之術皆出ニ於戲ニ玩ニ雖ニ君子ニ之不屑一然モ  
 或ニ留意於鷹ニ鵠ニ者観此有ニ以得ニ其ニ備レ急云」一ウ  
 正統甲子猶月暇日書于匪懈堂之梅竹

軒一

教ル  
ニ鷹鵠ニ名

○黃一鷹教<sub>之乙</sub>之雉鵠<sub>之</sub>白鷹投伊昆。教<sub>之</sub>之雉鵠<sub>之</sub>。甫加乙者。白木鷹。教<sub>之</sub>之雉鵠<sub>之</sub>。  
 鴨<sub>之</sub>○角一鷹召鵠教<sub>之</sub>之雉兔<sub>之</sub>。○鵠子結外。教<sub>之</sub>之鵠<sub>之</sub>○青鵠非耶  
 下<sub>之</sub>教<sub>之</sub>之鵠雀<sub>之</sub>○鵠鵠雜親。教<sub>之</sub>之鵠鵠<sub>之</sub>○免一鵠蓋加耳。教<sub>之</sub>之雉兔<sub>之</sub>  
 ○免一燕々一鵠者于非耶下。無<sub>レ</sub>教<sub>之</sub>而有<sub>レ</sub>名○籠一奪都弄太。教<sub>之</sub>之鵠<sub>之</sub>  
 鵠鵠<sub>之</sub>○黃鵠具只乃。亦<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>教<sub>之</sub>而有<sub>レ</sub>名○海青松鵠。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>教<sub>之</sub>而至<sub>レ</sub>下於  
 有<sub>レ</sub>中折<sub>之</sub>鵠雜<sub>之</sub>者<sub>之</sub>上

昔<sub>ノ</sub>楚文<sub>ノ</sub>王好<sub>ム</sub>獵<sub>ヲ</sub>有<sub>ル</sub>下人獻<sub>ル</sub>奇<sub>ノ</sub>鳥<sub>ヲ</sub>一者<sub>は</sub>是<sub>レ</sub>謂<sub>ル</sub>海青<sub>ト</sub>二二才

爲 ス 獵 ヲ 於 ホウタクニ 夢澤 モウゾク 一毛群羽族 モウグンウノクアラノカヒキフヒツ 爭 ヒツ 噩競 ヒツキ 搏此 ノ 鳥瞪 ミアハ 二

目 ヲ 雲 一 際 アイニ 一無 クモノナラハ 二搏噬 ウチクフ 之志 ノシ 一王謂 ヲ 二獻 ル 一者 ヲ 一曰 ヲ 汝 ヲ 將 スル 欺 ハヤ

レ 余 ヲカ 耶答 ヘ 曰 クモノナラハ 若效 ウチクフ 二於雉 ニ 兔 ニ 一臣豈 ミアヘケンゼンヤ 敢 スナハナソニカシ 献俄 ニ 而雲 ノ

際 アヒタニ 有 リ 物鮮 カニ 白 シ 不 レ 辨 ヘ 二其形 ヲ 一此鳥便 スナハナソニカシ 簪 シバシバサ 翅 シバシ 而昇 シメノボル

失 ウ 二其所處 ヲ 一須曳毛墮 シハラクアツテ 若雪血 オノコトノ 一 下 ルコト 二如 シ 雨有 テ 二大

鳥 オノ 墜 レ 地 ニハカニ 度 二 其 ノ 両翅 ヲ 一其 ノ 大數 ヲ 一里衆莫 シヨフリコト 二能識 テ 一有 テ

博物 ハクフツノ 爵子 ヲ 曰 ク 此 ノ 大鵬離 レ 也由 テ 此觀 レ 之無所 レハ

レ不教 ヘカラ 亦有 リ 一也且教 レ 之術備 ヲ 二於時人所為 ノ 二ウ

亦無 シメ 一也且教 レ 之術備 ヲ 二於時人所為 ノ 二ウ

レ不須 ヘカラ 以名定 ム 一也且教 レ 之術備 ヲ 二於時人所為 ノ 二ウ

レ不教 ヘカラ 而有名凡鷹 ハシタカ 鶴所教 ハシタカ 大率若 シ 耳

傳習 ハナフコト 已久不三必更立 ニ 他法 ヲ

用 ル 藥法 ヲ

夫鷹鶴 ハセト 本有 リ 二凌霄 リヤウノ 之氣 キ 而見 ル 一屈於人 ルニ 一飢 ルスハ 則

隨人飽 スハ 則揚去 ケル 故其生 スルコト 一病也 ヲ 率皆傷 リ 一心迫 カセマル

レ情怯 ハシタカイハリ 勞內一熱調保有 レ 一違失 コトナフ 二其本性 ヲ 一耳作 ルニ 一食 ヲ

當一細切 コマカキル 一而不 シメアラクセ 一龜可也 ハシタカ 鷹鶴有 ラハ 二蟲子 シラミ 一用 テ 二草粂 チウ



如或為レ物所觸目晴迷眩而勢急者用二當

歸散若不レ得二當歸散人一尿灌レ口爲妙○鷹

鵠凡有二不安之證當忌三鴨與二白雞黃狗肉

凡用レ藥多少宣レ隨ニ鷹之大小一

剤藥法

●龍一腦一圓龍一腦半錢研大一黃五一錢人一參三一錢右三一味內除二龍腦外合

為二細末一入二龍一腦一令レ均滴水作丸如三赤一小豆大一以金箔一為衣每服二一丸

●朱一砂一散朱一砂雄黃各一錢研麝香半錢研三稜二錢雞爪者山茨菰千金四才

子大戟各一錢半右七一味內除二朱砂雄黃麝香一別研外合為二細末一入二研藥一令レ均以二葷管子一盛レ藥一小許吹二入鼻中

●皂角散皂角半錢水半錢煎待冷入鼻令擂之

●煮肝圓胡黃連去レ鬚大一黃黃一柏去二龜皮一人一參去レ芦苦一參右七

味各量二四一錢一除三蒲黃外一合為二細末一入二蒲黃一令レ均納二豬肝內一以竹葉一包裏用

童便一煮熟去レ肝取レ藥爲丸如二赤小豆大一每服三丸漸加至三五丸二

●當歸散當歸一錢大一黃二一錢右二一味咬一咀用二童便一煎去レ滓待冷灌下

●黃連散黃連大一黃蒲一黃黃一柏人一參右五一味各量二一錢一咬一咀都作二

服 二用二并一花一水一小鐘煎至二半鐘一去レ溼待レ冷灌下ス

●水銀散 水一銀半一錢輕一粉麝一香各一錢右合研不レ見二水一銀一星為レ度搽カスカリ

有 二有二度搽ス

蟲處 一

歲在二王戌 二各有ア鴉一鶴善一才者ノ一一日鼻息塞

急目有二露一涙時人一皆以爲ニ項一溺一欲レ灸 セントレ之ヲ余

以一爲鷹一鶴不可以下二人病一治之試以ニ朱一砂一散 ハナイキフサカリ

吹レ之且用ニ煮肝一圓一果有ニ神效至レ今存焉厥

後余得二白一黃一鷹一甚愛レ之是ニ時鷹一病方興一

洞之内如レ掃無レ遺一一日此鷹果有ニ退一食激一

熱之證 二人皆曰當避方置之余於レ是用ニ龍

腦一丸一獨此一鷹存焉又今年秋之在ニ薪水一也

鷹事方盛 之キソビ競ニ一誇其能將ニ還鷹一病亦興生一者ノ五才

十常一二余之所レ養有ニ七病一勢已一兆時一無ニ

他妙一藥一止以ニ黃一連一散一理レ之及ニ其還一也六一鷹

無レ一恙而唯一一鷹凍一死一耳余一之所レ驗頗一多姑

舉ニ數一條一明ニ其用レ藥之妙一觀此者足ニ以取レ證

焉々之養鷹之方之矣 ○時人教鷹

吐鷹調習法

吐一鷹初 捉テトラフ時ハ 則惡人アラス 怯一勞內カタノレ 一熱煩渴ヒノカニ 須ス三即スヘカラク 勸チス トトレ水坐スムル時ハ 于無人暗一味涼所アノアイノキニ 一飼ブニヨトキ トトレ食ス 時人潛入ヒノカニ 不

レ令ラキヤウ 鷹トウセ 驚トウセ 一動スムル時ハ 一勸ス トトレ食ス 則鷹アマシ 甘シヨクス 一食ス 矣

新一鷹畏アラス 人ヒト 數飛スムル時ハ 勿ス 二急一速拳持ニケンヂルコト 一須ス 下待スヘタク 二二一三一日タ 一五ウ

後夜則拳チニス 之ヲ 然トソ 不レ 二徹夜拳持ナツヤンチセ 一持久トラス 一晝クセシ

夜不離手ハナサレ 坐ス 架カ 則必ス 二人一衆多處キニ 一

吐鷹捉トラフ時ハ 則本肥トス 不レ 下ル 而ハ 調習シメル時ハ 不レ 厥ハ 人ヒト 則初チ

引テ 一則雖トキ 来ル 不レ 直ハ 而ハ 到ル 二其習フニ 一常ニ 不シ 可ラ 据ス 二遠スツ

引テ 一則雖トキ 来ル 不レ 直ハ 而ハ 到ル 二其習フニ 一常ニ 不シ 可ラ 据ス 二遠スツ

引テ 一則雖トキ 来ル 不レ 直ハ 而ハ 到ル 二其習フニ 一常ニ 不シ 可ラ 据ス 二遠スツ

引テ 一則雖トキ 来ル 不レ 直ハ 而ハ 到ル 二其習フニ 一常ニ 不シ 可ラ 据ス 二遠スツ

下シメ 一食後拳ス 二之ヲ

觀チ 二鷹トウ 之柔順シワイシニシメ 徒フラ 人ヒト 引ク 一食服シムシク 布カタマリツカ 塊ヨナラハ 耶塊チ 耶則チ

内ラウ 一陋有ラウ 一油ラウ 一疑結布ラウ 二羽ノ 一作レル 肉藏カタナヒンテ 耶塊チ 耶則チ

之ヲ 則翌ヨクキヨウ 晓アラキツ 一還吐ス 二之ヲ 則去ル 一龜アラキツ 内清布ラウ 則爲ヨント 一六才

越 <sup>テ</sup>二六七日 <sup>ヲ</sup>二三度及 <sup>シテ</sup>二水食 <sup>シメ</sup>肥得 <sup>ルニ</sup>中須 <sup>二二三</sup>  
日 <sup>ニシメ</sup>登 <sup>リ</sup>山拳持 <sup>ス</sup>而引頸省聲見 <sup>(10)</sup>飛雉則垂手

下 <sup>ヲ</sup>及放 <sup>ツ</sup>

新鷹放教法

拳 <sup>スル</sup>二新一鷹 <sup>ヲ</sup>一者日將 <sup>スル時ニ</sup>レ暮 <sup>ント</sup>矣見 <sup>ニ</sup>當 <sup>レ</sup>入 <sup>人ニイ</sup>近飛 <sup>ク</sup>一好 <sup>ニ</sup>手放 <sup>ツ</sup>  
レ之得 <sup>ヲ</sup>レ捉 <sup>ハトルココラ</sup>則勿 <sup>レ</sup>急 <sup>ハ</sup>速直 <sup>ニ</sup>進 <sup>スルコト</sup>一此恐 <sup>レハ</sup>鷹之驚惶 <sup>カヤウクワシスチ</sup>棄 <sup>ツ</sup>  
去也作 <sup>シ</sup>聲呼 <sup>レ</sup>之須 <sup>シテ</sup>下待 <sup>シテ</sup>二甘一食 <sup>スルヲ</sup>一而 <sup>シメ</sup>後 <sup>ニ</sup>一遮 <sup>シヤ</sup>一面向回 <sup>メシクワイ</sup>一步  
漸進 <sup>ク</sup>到 <sup>チ</sup>鷹 <sup>ヲ</sup>一先執 <sup>ニ</sup>結 <sup>シ</sup>足 <sup>一皮</sup>貫 <sup>シ</sup>長 <sup>ニ</sup>皮 <sup>上此</sup>此慮 <sup>レ</sup>二鷹 <sup>ノ</sup>  
之鷹 <sup>ヲ</sup>一去 <sup>シコトヲ</sup>一也雉 <sup>ヲ</sup>腰折 <sup>シ</sup>殺 <sup>シメ</sup>除 <sup>シ</sup>二熱 <sup>一</sup>血第 <sup>一</sup>肉及 <sup>ビ</sup>内 <sup>一</sup>肉 <sup>ヲ</sup>  
并餵 <sup>カフコト</sup>半 <sup>一</sup>食 <sup>一</sup>餘許 <sup>バカリニシメ</sup>而 <sup>シメ</sup>一後浮取 <sup>シニス</sup>其 <sup>ノ</sup>浮 <sup>一</sup>取 <sup>シ</sup>之法 <sup>人</sup>六ウ  
之手 <sup>ノ</sup>執指納 <sup>シ</sup>鷹 <sup>ヲ</sup>之兩 <sup>一</sup>脚 <sup>一</sup>間 <sup>ニ</sup>二 <sup>一</sup>三指并執 <sup>トル時ハ</sup>二兩 <sup>一</sup>  
脚 <sup>ヲ</sup>一則自 <sup>一</sup>然 <sup>ニシメ</sup>而解 <sup>シ</sup>也或 <sup>ハノ</sup>曰 <sup>ハ</sup>鷹熱 <sup>一</sup>物雖 <sup>之</sup>トセ <sup>レ</sup>調 <sup>フト</sup>二鷹 <sup>ノ</sup>勞 <sup>ス</sup>  
一不可 <sup>カラ</sup>一則溫 <sup>シメ</sup>食 <sup>ヲ</sup>一况 <sup>シナ</sup>新 <sup>一</sup>鷹畏 <sup>レテ</sup>人内 <sup>一</sup>怯 <sup>ノ</sup>之氣未 <sup>タ</sup>  
レ <sup>シ</sup>其 <sup>ノ</sup>心煩 <sup>ハシ</sup>熱 <sup>ス</sup>其 <sup>可</sup>服 <sup>シ</sup>二熱 <sup>一</sup>食熱 <sup>一</sup>血 <sup>ヲ</sup>乎必 <sup>ス</sup>少噬 <sup>シ</sup>  
都邑支端 <sup>ノ</sup>肉 <sup>ヲ</sup>一而浮取俄 <sup>シメ</sup>而氣歇其 <sup>ノ</sup>雉 <sup>ヲ</sup>溫 <sup>シメ</sup>肉 <sup>ヲ</sup>  
更銅 <sup>ニ</sup>二半 <sup>一</sup>食 <sup>一</sup>餘許 <sup>カリヲ</sup>一可 <sup>之</sup>也

凡々鷹不可二多放疲勞新一鷹尤可レ慎也初放

シハナツチ

之日與二一三一日不過二一一手五一六一日二一手至二

一朔一母レ過二三手一小一放為レ妙熱則不レ拘二手一數一

粗知二鷹一理一者此際須ニ毎一日捉レ食為レ妙若間一七才

断放捉生レ病矣又云暮手須ニ捉而甘食一則

其鷹暮必力捉此言似二乎巧一然雖ニ老鷹ト終

レ之慎レ之

凡鷹放使之日鷹一性本一柔ニシテ而瘦スル時一則飼二半一食

可也本性惡而肌肥則飼三二一三一點可也

日放ノ時ハ一則勞レ身内一渴熱ニ常多當ニ此之時一恣ニ

キス

スル時ハ

服ニ熱一食熱ニ血一則因ニ混合集一必遲一下生レ病矣

慎レ之慎レ之

凡鷹放使之日鷹一性本一柔ニシテ而瘦スル時一則飼二半一食

可也本性惡而肌肥則飼三二一三一點可也

凡性一惡一鷹登山欲レ放ントレ之時專不レ向心人一尿

和レ食ニ一三一点可也又捉ニ雉于空中一墮レ地内

傷スルニモ亦用為レ妙鶴一同一七ウ

凡鷹春一秋下肥無レ害冬一月極一寒不可ニ上一肥

雖トモレ然過一肥スル時ハ則不可ニヤハ

性一惡一鷹大一肥スル時ハ則有ニアリ

之志一量ハカラチ宣クレ飼フ之ヲ  
 凡鷹多放サハ則知三主ノ之不二飽アクマチ一飼カハ一或貪捉或選ハムサホリトリ  
 雌一雉チワ一此レ一則知ルニ雄一雉チノ之力一強ツヨキヲ也故以二雄一雉ニチ一爲ハ  
 食呼一引飼チ而教ヲシフ之ヲ  
 上チ木不レ下ラ鷹ハ呼ヒ引キ來ル時ハ則須タシメテ下シ使カハニ甘シ一食セ一而シメテ後浮スル時ハ  
 取シス上シ不レ然ラ而即ニ時浮取スル時ハ則其ノナラハシ習スノソ不レ可ラ棄スノソ矣ラ  
 凡鷹不レ使ハスヘ而坐カヒ一養肥スル時ハ安スル時ハ則懷イダク二凌レウ一雲シメテ之志ヲ矣ラ  
 雖トモニ二一三一ト日ト一坐シメハツ一養鷹須ハシメテニ朝ハシメテ一昏拳スルレ之使シメテニ其柔順ノシワシヌンラ一八才ハ  
 後放シメハツ之ヲ爲妙ヨシハツ○初シメハツ放シメハツ三千多シメハツレ樹處シメハツ一  
 凡鷹小ソ一食ハシメハツ無シカイ害因テニ多シ一食シメハツ而生スル時ハ病ラ但シメハツ瘦シメハツ一鷹シメハツ小シメハツ  
 食スル時ハ則加シメハツ瘦シメハツ矣シメハツ且シメハツ勿シメハツ食シメハツ脚カフコト一力シメハツ一食シメハツ二脚力シメハツ一則成スル時ハ二霜シメハツ  
 角及ヒ吾シフシヤ一叱クワツ邪シ一臥シメハツ一矣シメハツ鷹多シメハツ一放シメハツ内シメハツ一熱シメハツ日シメハツ一常シメハツ食シメハツ半シメハツ  
 下チ後ニ夜ム一必ススム勸シメハツ水シメハツ  
 二一月以一後一十一月以一前陽一氣盛ハシメハツ一長不シ可カラ二當テ午ニ  
 放使チ冬ハ一則可シ一服ハシメハツ溫シメハツ一食シメハツ一春ハシメハツ一秋ハシメハツ一則不レ可シ一服ハシメハツ溫シメハツ一食シメハツ  
 常使ニシムルサ二水一食セ一爲トモ妙トモ雖トモ二雪一上ト無シ一風ハシメハツ日ハシメハツ一煖カカル時ハ一則終ヒキセス日ハシメハツ

放使爲妙

不一幸 両一鷹相一捉母下以二他一術一救  
ち之両一鷹之項」八ウ

一時堅執則自然而解

冬一月因ニ兩一雪一或ニ因ニ執ニ雉于雪一水一鷹羽濕而

凍コホラハ 即チスベ 坐ニ一照テラス 陽ニ地ニ 一旦ツ無キ 烟リ 細一火ヲ 盛テ 器ニ置キ 於外ニ

地ニ以テ鷹遠拳而照レ之又以テ手照シメレ火捦レ鷹剛

其ノ羽可シ速ミヤカニ一乾カワク一也

肥一鷹性一惡內一陋每飼三水一食一連服布一塊耶而  
シヤウ アラク ニ フ ツキリニ シメク ブ ツカイ ヨカ

朝一昏拳一持  
則肌浮一柔性一順之  
卦

舊ノ歌  
ススム時ハ  
食ヲ  
則上一  
肌肉一  
洒盡ロウコトク  
下ノ其食ヲ  
而シメ  
後水一  
食

二  
一  
三  
一  
點及  
魄耶  
多少量  
宜  
服  
之  
朝  
一  
昏  
拳  
一  
特

商  
タマ  
机  
ツヘ  
而後故  
ツ  
之  
ヲ  
一  
九  
才  
ベ  
シ

瘦鷹上一肌法

瘦一鷹以チ  
二乳一汁タ  
一和マセテ  
レ食ニツ  
銅ツ  
レ之タ  
又タ  
温一食數一々  
銅ツ  
レ之タ

半一食可也下一糧雖盈上一糧空一則又飼之矣

自二捉一雉與二射雉中二一新一雉一則皆溫一食

凡 鷹ノ内一陋皆以ニ羽一塊ヲ耶治レ之又以ニ人一尿一和レ食飼之ヲ

作ル食法 朝則半食夕則大鷹大雉脚

小鷹小雉脚是適中也半食

謂ニ雉半

脚量ニ也

作レ食人須ニ先洗レ手執作一當ニ細一長ニ而勿レ  
二鷹大

若有ニ乾處ニ必去レ之又去下皮一膚間如ニ鼻一汁一不一九ウ

淨ノ物上又去皮與油而後又用ニ雉羽一磨ニ肉

上醜ノ物去脚一力一以レ刀亂裂沉ニ冷一水一淨洗銅

レ之食之多一少量ニ鷹之大一小一適一中銅レ之

坐ニ鷹處法

常坐ニ下寒一溫適一中無ニ烟一氣ニ淨廳ニ爲可冬一月極

寒ニ則常坐ニ温一處ニ不レ妨又冬一日坐ニ陽一處ニ然肥一

鷹則雖ニ冬月不許ニ當レ陽坐ニ之春秋坐ニ陰一地ニ

鷹甚惡ニ烟一氣ニ糠一烟尤ニ毒養ニ鷹之家々内及

近一地勿レ燒ニ糠火此鷹病之所ニ由生一也

想一鷹安一否法<sup>(15)</sup>一〇才

凡鷹坐レ架強拂レ羽收シメ一足宿スル時ハ則回レ頭而挿ニ  
 左一右ニ伸シ氣屎<sup>(16)</sup>則一日二一三一度所レ屎大如掌  
 黒一白相一離肩背羽不レ動食倍<sup>(17)</sup>上則柔一軟下  
 則堅一硬肛一門窄小而冷常食速下此是平

安ノ之候也

聞<sup>(18)</sup>見経験方

鷹有<sup>(19)</sup>二足傷一破浮一腫一須レ安ニ一坐暗一寂處ニ或以<sup>(20)</sup>レ醋<sup>(21)</sup>  
 和レ墨塗ニ傷處一又以ニ善養一令<sup>(22)</sup>ハル時ハレ不<sup>(23)</sup>ニ驚一動一則計日  
 而差<sup>(24)</sup>○鷹之頂勒有ニ三一四一種一或促一息或

有<sup>(25)</sup>レ涙或如<sup>(26)</sup>レ人ノ之疥瘡二而毀或兩肩垂下或<sup>(27)</sup>一〇ウ

兩一足浮腫皆頂勒證也皆以ニ川一中小螺<sup>(28)</sup>一去<sup>(29)</sup>

レ皮<sup>(30)</sup>肉一片裏銅<sup>(31)</sup>レ之ニ一一度即差<sup>(32)</sup>○鼻一頂一勒

鼻一上凹<sup>(33)</sup>處針一灸且鼻邊毛一呈以ニ墨一絲一貫<sup>(34)</sup>レ針<sup>(35)</sup>

貫<sup>(36)</sup>刺又以ニ艾灸ニ之兩一邊針一孔一

喘一促鼻有レ聲者曰二鼻一頂一勒一目有レ涙而眇者  
 曰二目一頂一勒一両一翼垂一下者曰二翼一頂一勒一身有レ如  
 疡瘡一者曰二身一頂一勒一足一腫者曰二足一頂一勒一有  
 證一者坐ニ于無レ烟暗一寂處一不使二驚一動一且以ニ好  
 食一善養亦以ニ川一中小一螺去レ皮裹レ肉銅レ之則  
 無ニ不ト云レ愈者一足一頂一勒川一中冷一沙盛於瓢一子ニ安  
 於缸一上一以ニ病一鷹一坐ニ於冷沙上一過ニ一回五一夜一若  
 不差以ニ愈為レ度連ニ夜坐レ之甚良シ ○鷹病  
 皆畏レ人怯一勞煩一熱内一渴而出山一間溪一水有  
 レ虫名曰ニ下子ト也只四一五一箇肉一片裹銅レ之神  
 效再一服亦可又黃一藥木實細一末肉一片裹銅  
 レ之 ○鷹或多放或遠一路拳來身一勞屎中  
 黒點不塊以馬糞水和レ食銅レ之  
 霜角鷹不ルノニ三大一發一之時喘一息自一若又貪捉レ雉  
 粗知ニ鷹理一者不知ニ此一病之生一如レ常而放甚  
 不可也此病者内一冷外一熱而出可レ知ニ此一病ニ一  
 一ウ

之出

ルコト  
一也當一初始  
ニ之時放一屎不シメ  
レ長カラ  
而断一絶ゼン

不能

ハ  
ニ放一屎  
一當レ如レ此則須クトヲル  
ニシムル時ニハ  
レ下捉ニ生一雉一以ニ病鷹一多

噬

フハシム  
ニ熱一血熱一肉一銅  
半一食ス上如レ此三一四一度使シメ  
シムル時ニハ

熱

セ  
ニ則可ニ能治之須ク  
ニ銅熱一血可也若不レ捉ニ生

雉

ヲ  
ニ須ク  
ニ雀鼠ノイキナカラ  
ニ中生  
一捉噬レ之熱一血熱一肉甚可之

○上

レ木不レ下鷹呼引一來甘一食ス  
時肉一片二一三

點和

ペセ  
ニ人一屎一銅レ之其習永一棄矣

凡鷹無

ノ  
レ侵也採ニ取苦一參一根一取ニ水一盆  
ニノンヲ  
一煎シメ至二半

虫所

ノ  
ニ之  
レ限坐レ架待乾

盆待

ニ  
ニルヲ  
ニ鷹子縛置右水塗擦以ニ全一體盡ク  
ウルヲヘルヲ

爲レ限

ス  
ニトスエテ  
ニカヘルヲ  
ニカヘルヲ

盆待

ニ  
ニルヲ  
ニ鷹子縛置右水塗擦以ニ全一體盡ク  
ウルヲヘルヲ

盆待

ニ  
ニルヲ  
ニカヘルヲ  
ニカヘルヲ

凡鷹或

ハ  
ニ累一日或  
ニ六一七一日專不食若勸  
モツハラ  
シスムル時ハ

退走

シリソキワシリ  
ルカヘミ  
者是必身一勞煩一渴所  
ニカツノ  
ニイタス

不レ顧者

レ  
ニカム  
レ致生  
スムコト  
レ病也

レ羽如

レ常ノ

鷹若見レ水欲ス  
 レ飲先勸ニ葉枝茶一水一繼勸ニ月一經  
 水一鷹若嗜食則不拘時雖レ不貪食二飲水二忌  
 レ前須下捉ニ生雀銅之雖レ不貪食ヲ  
 嗜食如  
 則生雀連續生一捉係ニ坐一架上ニ鷹有ニ食心一則」一二ウ  
 自然而食其一病即差

凡鷹滿ニ身疥瘡一者身一頂一勒也哺乳小兒黃  
 糞和水搅レ之細一布ニシメフルビ篩レ之以ニ竹一筒ニ納于鷹口

中一以ニ食岱充滿一為限灌下一一度即差

凡鷹多放雖無ニ病一證放一鷹者意謂多一放以テ  
 病爲レ嫌則肉一斤ニ三點和ニ月一経一水一銅レ之則  
 病不生雖レ不二多一放一鷹是熱一物用レ心内一渴須ニ  
 初一夜一一二更中勸レ水以ニ鷹不ルサレ飲爲限而止

凡鷹一鶴屎有ニ長一虫一榧ニ子細一末ニメニクツツミ肉裏銅レ之然モ  
 差有ソセイシニテレ毒狼一牙一草煎レ水和ニマセテニ食銅レ之肉一片二一三ニ一三才

點裏清蜜銅レ之則長一虫盡死此一藥尤妙

凡鷹遠一路拳來身一勞煩一熱似レ無ニ病證一粗知二

鷹ノ理者以爲無レ病放ニ使則病一死丁寧慎勿ニ  
 放ニ使ニ須ニ坐ニ養休ジ氣十一餘一日後更調放ニ使為  
 レ妙ヨント

八一九一十一月間鷂子體大如レ鷂者勿論甫一羅  
 山一陳羅一取勿レ急一速拳一持ニ須下於ニ寒一緩適一中處  
 坐ニ養往々拳一持上方ニ夏一節一毛一羽落ル時遲一緩ニシメ  
 レ落須下鶴離捉下ニ一日飼ち之則毛一羽一時  
 盡落鷂羽不レ落亦食爲妙且鷂與レ鷂皆熱物而一三ウ  
 時<sup>(2)</sup>一又極ノ熱鶴一子浴ヨクスルフトレ水一日内須ニ四一度ナル一冷  
 水改給羽衣雖未シ称節趁ニ孟一秋須レ拳レ之漸  
 レ近而呼日一漸遠引々食則以ニ初一肢児一鷂雌  
 雄一相一間爲食飛一引飼而教レ之熱一調後朝暮  
 乗ニ涼一氣一拳一持歸早一粟田一頭尋ニ一覓児一雉放レ之  
 得レ捉則勿レ急一速直一進スルコト一作聲呼レ之須下待ニ甘一食  
 而進上飼ニ半一食一餘許一後浮ニ取兒一雉一慣熱々一捉ル時ハ

則雖二冬一節春一時一雌一雉皆可レ捉也鶴子放一使  
 之時須レ使二下一糧亘盈不レ尓則生レ病且熟一調一四才  
 放一使レ時ハ則只於二朝一夕一拳一持放使不レ妨然性一惡  
 則不拘ニ此法一鶴一子初捉レ人怯一勞内一熱アラキ時ハ  
 煩一渴ノ之心未レ珍加之以ニ寒一凍一下一肌拳一持急一  
 速調放レ則必一死丁ニ寧粗知ニ鷹一理一者ノ不知ニ調一  
 養之法一反謂レ易レ斃惑之甚キ之サニ矣當如ニ上法一調一  
 養教一放レ則多壽不レ病矣凡用レ藥放一教諸一法  
 與レ鷹同籠奪與レ鶴同

## 鷹賦

惟茲禽之化一育実鍾山之所レ生資ニ金一方之  
 猛一氣一檀ニ火一德ノ之炎一精一何虞一者ノ之多一端運ニ横一四ウ  
 羅ニ以羈一束綴ニ經一絲於雙一臉ニ結ニ長一繩於兩一足ニ  
 飛不遂ニ於本一情一食トモ不レ充ニ於所レ欲逸一翰由テ而  
 暫歛シメ雄一心為ニ之自局若乃貌非不レ一相ニ乃  
 多一途之指重ニ十一字一尾貴ニ合一盧ニ立コトハ  
 一立如ニ植一木ニ望コトハ似ニ

愁「胡鬚同」<sup>ハヌ</sup>「釣利脚」<sup>ハナリハタ</sup>「等荊枯」<sup>タヌニ</sup>「亦有下白」<sup>ハシメ</sup>「如二散花」<sup>ハシメハナ</sup>

赤「如中點」<sup>ハシメナル</sup>「血」<sup>ハク</sup>「一大文」<sup>ハチモン</sup>「若レ錦」<sup>ハナシ</sup>「細一斑」<sup>ハシメ</sup>「似レ纈眼」<sup>ハシメハシメ</sup>「類二明」<sup>ハシメハシメ</sup>「珠」<sup>ハシメ</sup>

毛「猶二霜」<sup>ハシメ</sup>「雪」<sup>ハク</sup>「身」<sup>ヒメ</sup>「重」<sup>ハシメ</sup>「若レ金爪」<sup>ハナシ</sup>「跠」<sup>ハシメ</sup>「如レ鐵」<sup>ハシメ</sup>「或復頂」<sup>ハシメ</sup>「平」<sup>ハシメ</sup>

似「削」<sup>ハシメ</sup>「頭」<sup>ハゲ</sup>「圓」<sup>ハク</sup>「如レ卯」<sup>ハナシ</sup>「臆」<sup>ハシメ</sup>「濶」<sup>ハシメ</sup>「頸」<sup>ハシメ</sup>「長」<sup>ハシメ</sup>「筋」<sup>ハシメ</sup>「龜」<sup>ハシメ</sup>「脛」<sup>ハシメ</sup>「短」<sup>ハシメ</sup>「翅」<sup>ハシメ</sup>「厚」<sup>ハシメ</sup>

羽「勁」<sup>ハシメ</sup>「暉」<sup>ハシメ</sup>「寬」<sup>ハシメ</sup>「肉」<sup>ハシメ</sup>「緩」<sup>ハシメ</sup>「此」<sup>ハシメ</sup>「之才」<sup>ハシメ</sup>「用俱」<sup>ハシメ</sup>「爲二絕」<sup>ハシメ</sup>「一伴」<sup>ハシメ</sup>「或」<sup>ハシメ</sup>「如」<sup>ハシメ</sup>

鶴「頭」<sup>ハシメ</sup>「或」<sup>ハシメ</sup>「似」<sup>ハシメ</sup>「鵠」<sup>ハシメ</sup>「首」<sup>ハシメ</sup>「赤」<sup>ハシメ</sup>「晴黃」<sup>ハシメ</sup>「足細」<sup>ハシメ</sup>「骨小」<sup>ハシメ</sup>「肘懶」<sup>ハシメ</sup>「而」<sup>ハシメ</sup>「一五才」<sup>ハシメ</sup>

易「驚奸」<sup>ハシメ</sup>「而難」<sup>ハシメ</sup>「誘住」<sup>ハシメ</sup>「不可」<sup>ハシメ</sup>「呼飛」<sup>ハシメ</sup>「不及」<sup>ハシメ</sup>「走」<sup>ハシメ</sup>「若」<sup>ハシメ</sup>「斯」<sup>ハシメ</sup>

之輩「不」<sup>ハシメ</sup>「如」<sup>ハシメ</sup>「勿」<sup>ハシメ</sup>「有」<sup>ハシメ</sup>「若」<sup>ハシメ</sup>「夫疾」<sup>ハシメ</sup>「食速」<sup>ハシメ</sup>「消此」<sup>ハシメ</sup>「則有」<sup>ハシメ</sup>「命」<sup>ハシメ</sup>

鴉「頸猴」<sup>ハシメ</sup>「立」<sup>ハシメ</sup>「是」<sup>ハシメ</sup>「為」<sup>ハシメ</sup>「無」<sup>ハシメ</sup>「病廁」<sup>ハシメ</sup>「門」<sup>ハシメ</sup>「忌」<sup>ハシメ</sup>「大」<sup>ハシメ</sup>「結」<sup>ハシメ</sup>「肛」<sup>ハシメ</sup>「惡軟」<sup>ハシメ</sup>

條「不」<sup>ハシメ</sup>「欲」<sup>ハシメ</sup>「絕」<sup>ハシメ</sup>「背」<sup>ハシメ</sup>「不」<sup>ハシメ</sup>「宣」<sup>ハシメ</sup>「喘」<sup>ハシメ</sup>「生」<sup>ハシメ</sup>「二於窟」<sup>ハシメ</sup>「者」<sup>ハシメ</sup>「則好」<sup>ハシメ</sup>「眠」<sup>ハシメ</sup>「生」<sup>ハシメ</sup>

於木「木」<sup>ハシメ</sup>「者」<sup>ハシメ</sup>「則常立」<sup>ハシメ</sup>「雙」<sup>ハシメ</sup>「骭長」<sup>ハシメ</sup>「者」<sup>ハシメ</sup>「則起」<sup>ハシメ</sup>「遲六」<sup>ハシメ</sup>「翻短」<sup>ハシメ</sup>

者「則飛」<sup>ハシメ</sup>「急」<sup>ハシメ</sup>「毛」<sup>ハシメ</sup>「衣屢」<sup>ハシメ</sup>「改厥」<sup>ハシメ</sup>「色無」<sup>ハシメ</sup>「常寅」<sup>ハシメ</sup>「生」<sup>ハシメ</sup>「酉就」<sup>ハシメ</sup>

搥號「號」<sup>ハシメ</sup>「爲」<sup>ハシメ</sup>「黃」<sup>ハシメ</sup>「二」<sup>ハシメ</sup>「周」<sup>ハシメ</sup>「作」<sup>ハシメ</sup>「鵠」<sup>ハシメ</sup>「千」<sup>ハシメ</sup>「日」<sup>ハシメ</sup>「成」<sup>ハシメ</sup>「蒼」<sup>ハシメ</sup>「雖」<sup>ハシメ</sup>「曰」<sup>ハシメ</sup>「二排廬」<sup>ハシメ</sup>

性殊「之」<sup>ハシメ</sup>「二衆」<sup>ハシメ</sup>「一鳥」<sup>ハシメ</sup>「雌」<sup>ハシメ</sup>「則體大」<sup>ハシメ</sup>「雄」<sup>ハシメ</sup>「則體小」<sup>ハシメ</sup>「遇」<sup>ハシメ</sup>「レ」<sup>ハシメ</sup>「犬」<sup>ハシメ</sup>「則驚」<sup>ハシメ</sup>

猜見「人」<sup>ハシメ</sup>「則易」<sup>ハシメ</sup>「調」<sup>ハシメ</sup>「之」<sup>ハシメ</sup>「實」<sup>ハシメ</sup>「難」<sup>ハシメ</sup>「格」<sup>ハシメ</sup>「必」<sup>ハシメ</sup>「高」<sup>ハシメ</sup>「迴」<sup>ハシメ</sup>「室」<sup>ハシメ</sup>「必」<sup>ハシメ</sup>「華」<sup>ハシメ</sup>「寬」<sup>ハシメ</sup>

察「之」<sup>ハシメ</sup>「爲」<sup>ハシメ</sup>「易」<sup>ハシメ</sup>「調」<sup>ハシメ</sup>「之」<sup>ハシメ</sup>「實」<sup>ハシメ</sup>「難」<sup>ハシメ</sup>「格」<sup>ハシメ</sup>「必」<sup>ハシメ</sup>「高」<sup>ハシメ</sup>「迴」<sup>ハシメ</sup>「室」<sup>ハシメ</sup>「必」<sup>ハシメ</sup>「華」<sup>ハシメ</sup>「寬」<sup>ハシメ</sup>

「一五ウ」

葦以取ハテリ熱酒以ハチハラフ排寒ハラフ羈須ハラフ溫暖ハラフ肉不陳ハラフ乾ハラフ  
 近テ之ヲ令レ狎靜シメ之ヲ使レ安畫ハシ不離レ手ヲ夜便ハ火宿ス  
 微加シ其ノ毛ヲ一小減シス其ノ肉ヲ一肌ヲ肥腸ヲ瘦心ヲ和性ヲ靈シ  
 念絕ヒシ雲ニ霄ヲ志シ在ニ馳シ逐シ散者ハシメ也格者ハシメ也黃者ハシメ也甫羅也ハシメ者今ノ

真之ハシメ也

右古本鷹鵠方雖多不審依无類本

不能校合只任本書訖 通堯一六才

彰考館御本奧書

右一者以ハチ山ニ本藤ヲ右ハ衛ヲ門ヲ所持ハシメ本ハ令ハシメ書寫シ校合畢ニ秉應甲年六月六日吉本鷹鵠方以ニ水戸彰考館御本書寫之ヲ天保四年五月廿六日史館待命 平小山田 與清トモキヨ 一六〇

右此一帖者以二平與清小山田將曹自筆

本<sup>ヲ</sup>一於東武邸<sup>テイ</sup>舍手<sup>ミシカフ</sup>自下翰<sup>カノヲ</sup>書<sup>二</sup>一寫之<sup>一</sup>畢

天<sup>一</sup>保四年歲次癸巳<sup>キ</sup>仲秋下澣日

正木治部越智宿禰通堯

（花押）一七才

右古本鷹鶻方者以正木通堯手書本騰  
寫畢天保四癸巳之秋九月廿八日起筆  
十月五日終卷馴鷹繫務之間連夜務下  
採毫成功畢通堯者近江彦根之家士也  
善國學側耽探鷹書頃日奉主命來江戸  
館而勤仕余有邂逅者而交情密也固得  
借此書寫焉

雜司谷鷹人 片山勇八賢（花押）一七ウ

## (1) 注

正統ハ明英宗ノ

年号之十四年ヲ、

ク日本永享九年、

ヨリ嘉吉文安宝徳

ノ間ニアタル凡四百年

ハカリニナル

○草州湯柵州二字皆謬也

物自前以二黃柏實一搏

當レ作州草州則未レ詳ニ何

碎作レ湯称二草州湯治ニ

鷹虱一黃柏即今鄉

菜用レ皮黃柏木也

○梨蔓根即枯蔓根

到處有之我國鄉菜

也柏部根柏當レ作レ百

乃唐材也

○狼牙草俗名草鞋

菜到處有之

一本攀作レ反

一本身作鼻

一本百作等

胡黃之間二字麻字

脱歛

(9)	疑凝誤カ亦
(10)	下内當作肉
(11)	省肖誤乎
(12)	一本際作熱
(13)	食二間若飼文字
(14)	一本力字二字トモ
(15)	想相誤歟
(16)	屎累誤歟
(17)	一本頂作頂
(18)	皆頂ノ間ニ足ノ字
(19)	ヲ脱スルナルヘシ
(20)	一本下作可誤也
(21)	一本丁作下
(22)	而時之間ニ若シ
(23)	夏ノ字ナト脱セ
(24)	シニハアラヌカ

一本未作末  
初引ノ間ニ呼字  
脱スルカ可考  
一本丁作下誤

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号 24520247、研究課題名「放鷹文化と鷹書類の研究」、研究代表者 中本大）、生き物文化誌学会助成制度「さくら基金」による研究成果の一部である。

〈キーワード〉鷹狩り、韓国の鷹書、鷹鶴方

## **The Whole Sentence of the Text of Falconry Called “Yo-kotsu-ho” which National Library of Korea Owns**

**Yasuko NIHONMATSU**

The whole sentence introduces a text of the falconry called “Yo-kotsu-ho” which National Library of Korea owns. This text was established in Korea in the 15th century. An author is 안평대군(安平大君) 이용(李瑢). The point that is particularly important about this text is a sentence to see so that a written statement of expert opinion comes. I understand what kind of people read this text by this sentence in Japan. Furthermore, I can guess how falconry culture in Japan unfolded from the information. Therefore I think that the important clue that Japan and interchange of the Korean falconry culture become clear is provided when I introduce the whole sentence of this text.